



I-OWA マンスリー・セミナー講演より 『人口動態』から読む次世代投資

講演: 平山 賢一氏、レポーター: 川元 由喜子

最近は人口問題に、だいぶん関心が集まっていますが、日本だけではなく、中国でも人口減少や低成長といったことを気にする風潮になっているようですし、米国でも、低成長に対する怖れは強くなってきています。

人口そのものは世界的にどんどん増えている、だから世界は成長する、だから投資したほうがいい、という議論もあります。でもそれは違うんじゃないかと思えます。人口そのものより、成長率のほうが大事ではないかと思うのです。人口の増加率はもう増えていない。逆に下がってきている。これは経済にも投資にも影響を与えます。



世界の人口は、現在 70 億ぐらいですが、歴史的には 1 億人ぐらいで横ばいの時期が長く、19 世紀から急激に増加しました。1820 年ごろの成長率は、人口増加率・経済成長率ともに 0.5% ぐらいですが、産業革命、特に動力革命が経済成長に大きく影響し、経済はそこから人口の倍以上のペースで伸び始めます。

人類史上、最も経済成長したのは 1960 年代。これがピークです。人口増加率は 2% ぐらい、経済成長は 5% ぐらいまで上がりました。背景にあったのは、灌漑、肥料、品種改良などにより、面積当たりの農産物の収量がものすごく増えた「グリーン革命」です。それに戦争でたくさんの方が亡くなりましたから、戦後はその反動で、「ベビーブーマー」や「団塊の世代」と言われる人口急増がありました。人口がどんどん増えるので、経済成長もその 2 倍ぐらいのペースで進みました。

人口増加率は、今は、もう 1.1~1.2% です。予測をみると、10~20 年先には 1% を下回ります。経済成長率も右往左往しながら、だんだん下がってきています。80・90 年代は、先進国で 35~54 歳



長期投資仲間通信「インベストラيف」

の多消費世代が経済成長を牽引・維持し、2000 年代に入ってから、新興国・地域が伸びたので嵩上げされました。それでも、経済成長率のトレンドは下向きなのです。

60 年代のピーク以降は、一人あたりの成長率も下がって来ています。これは、人類のイノベーションが、1960 年代以降あまり進んでないということです。IT 革命や情報革命は、多くの人に、成長の果実を与えるものではありません。なぜなら、これらは少ない人数で多くのことができてしまうという革命だからです。

今、時代は生産の時代から消費の時代に移って行っていると思うのです。川上から川下のほうへ移っていく。世界全体の多消費年齢人口の比率と、生産年齢人口（15～64 歳）の比率を対比してみると、2013 年から 30 年までは、生産する人口より消費する人口の比率が増えるのです。ただ多消費年齢人口は、南アジアとアフリカに集中していきます。グローバルな経済戦略としては、この地域の所得を上げなければいけないということになります。所得が上がらなければ、自動車のようなぜいたく品を買うのは苦しいかもしれませんが、生活必需品の需要は伸びるでしょう。

講演では、人口動態の歴史について、また今後の金融市場への影響についても、さらに詳しいお話を伺いました。また、今後、しばらくはアクティブ投資がより有利な時代が続くという見通しや、小型株効果についてもお話いただきました。